

# ムスリム(イスラーム教徒)への差別、ヘイトスピーチ、ヘイトクライムを許さない!

昨年から今年にかけて起きたIS(イスラミック・ステート)による日本人人質殺害事件は、日本の社会に大きな衝撃をもたらしました。テレビなどのメディアでは連日のように、ISがどれだけ非道で残虐かというニュースがセンセーショナルに報道されています。

そしてそれは、日本で暮らすムスリムにも深刻な影響を与えています。事件が明るみになって以降、ムスリムに対する差別やヘイトスピーチ(差別煽動)が多発しました。

日本国内のムスリム団体には、差別・排外的な電話が多数寄せられています。学校ではムスリムの生徒児童に対して、「イスラム国だ、殺される」などと言ってからかうなどの陰湿ないじめも起きています。著名人では、エジプト出身力士の大砂嵐関に対して場所中に、「おい、イスラム国!」という心ないヤジが飛びました。またイラン出身の女優サヘル・ローズさんにも、「イスラム教徒はこの国から出ていけ」という内容の手紙が届いたといえます。

これらは「朝鮮民主主義人民共和国(DPRK)」にまつわる事件が報道されるたびに、朝鮮学校の生徒児童へのヘイトスピーチ、ヘイトクライム(差別犯罪)が多発した事例にきわめてよく似ています。どちらも悪質な人権侵害であり、許されない行為です。

現在日本には数万~十数万のムスリム(その多くは外国出身)が暮らしています。そしてその誰もが平和を愛し、平穏な暮らしを望む人々です。東日本大震災の折には、日本イスラーム文化センターが被災者への支援活動を行いました。関東や関西では、野宿者に対する炊き出しを定期的に行っているムスリム有志の方々があります。ISによる日本人誘拐事件の際には、複数の在日ムスリムの団体がISに対して抗議・非難する声明が出されています。

日本のメディアでは、テロや紛争などの中東問題と並べて語られることの多いイスラームですが、その文化には素晴らしい側面が沢山あります。在日ムスリムはそれらを私たちに教えてくれる大切な隣人です。私たちは、この日本社会の一員であるムスリムと共に、多様性にあふれたより豊かな社会を築くべきではないでしょうか。

最後に、紛争地域の子どもたちを憂い、平和を願って現地の状況を伝え続けてきた故・後藤健二さんの言葉を紹介します。

目を閉じて、じっと我慢。怒ったら、怒鳴ったら、終わり。それは祈りに近い。  
憎むは人の業にあらず、裁きは神の領域。—そう教えてくれたのはアラブの兄弟たちだった。

## ▼ 参考書籍

- ▶ 『イスラーム世界』片倉もとこ/梅村坦/清水芳見[編] 岩波書店
- ▶ 『「イスラーム国」の脅威とイラク』吉岡明子/山尾大[編] 岩波書店
- ▶ 『ふらんす特別編集 シャルリ・エブド事件を考える』鹿島茂/関口涼子/堀茂樹[編著] 白水社
- ▶ 『現代思想 2015年3月臨時増刊号 シャルリ・エブド襲撃/イスラム国人質事件の衝撃』青土社
- ▶ 『終わりなき戦争に抗う - 中東・イスラーム世界の平和を考える10章』中野憲志[編] 新評論

